N-5　石巻市牡鹿町十八成浜　　2012年5月24日（木）

報告者名　兼城　糸絵　　被調査者生年　1981年（男）
調査者名　高倉　浩樹　　被調査者属性　会社員／保存会の指導者
補助調査者　兼城　糸絵

話者について

話者は1981年に十八成浜にて生まれ育った。鮎川にある小学校と中学校に通い、剣道部に所属していた。卒業後は石巻市内に下宿しながら石巻高校に通った。その後は、石巻専修大に進んだ。高校･大学と吹奏楽部に所属し、クラリネットを担当していたという。その後、十八成浜にある実家で酒屋を経営していた。家は海岸のすぐ近くにあったため、3.11の津波で流されてしまったという。震災後は2011年9月から名古屋に本社を置くカー用品関係の会社に就職し、正社員として仙台支社にて働いているため、現在は仙台市内にて一人暮らしをしている。両親は現在も仮設住宅に住んでいる。父は養鶏をしていたという。

祭りとの関わり

十八成浜には「育成会」という組織があり、それが子ども神輿の活動を組織していた。祭りの際には大人が担ぐ神輿が進んでいくと、後ろからしゃんしゃんと鈴を鳴らして子ども神輿がついていく、という感じであった。その当時は小学校入学後から「育成会」に入会し、子ども神輿を担ぐようになった。その頃には「前夜祭」というのがあった。

かつては「青年団」があり、それに入ると祭りで大きな神輿を担ぐことができた。ところが、話者が高校を卒業するころには「青年団」が解散していた。その代わり、「実業団活動」が盛んになっていた。結果的に、大人がいるところでは酒も入るしということもあって、小学校卒業から高校までは神輿には関われなかった。

笛を始めた理由は､父親が勧めてきたからであった。父親からは「おまえは背が低いから神輿が担げないだろう。だから、笛吹きになったらどうだ？」と言われたという。そこで、中学校2年の夏ごろから笛を習い始めた。教えてくれたのは十八成浜に住むETさんである。もう一人笛がうまい人がいて、その方はGYさんという。GYさんは「自分吹き」（自分なりのアレンジを加えながら吹くこと）が得意で本当に笛がうまい人だったという。ETさんからは十八成浜の普通の笛を習っていた。習っていたのは実質3日間だけであった。教える側も酒を飲みながらだったということもあり、稽古を初めて一時間も経つと「おれ酔っ払ったよ～」などと言いだしていた。祭りに関わることになって、練習に参加したりすると飲めない酒も飲まされたりするうちに、飲めるようになった。

父親は30歳頃に十八成浜へ戻ってきたようである。そして、神輿の担ぎ手でもあった。その頃すでに若者の多くが十八成浜を離れていたが、金を集めて神輿を購入した。当時は4月11日に祭りを行っていたが、ホエンサマ（神主）にお願いして5月3日へ変更した。

（神輿の担ぎ手は何人かという質問を受けて）担ぎ手は8人担ぎから16人担ぎへ変更された。それは15年ぐらい前ではなかったか。それに、塩をまく人が1人加わる、という構成になる。

話者は鮎川にある小学校・中学校に通っていたが、3つの部落を足しても男性は12人しかいなかったという。十八成浜には同級生の男の子がいたが、親が離婚して引越しした。それ以外には女の子がひとりいる。

しかしながら、最終的には子ども神輿も無くなってしまった。それは子どもが少なくなってきているからだ。青年団も解散したので、その後は役場の職員や小学校の先生たちが神輿を担ぐようになった。話者は祭りが好きで毎年参加しているが、区が要請しても誰も担ぎにこなかったという。今年の本祭のように子どもが祭りで笛を吹く、

ということは今までの祭りで一度も無かったという。太鼓も同じで、今回子どもが本祭りでやったのははじめてだった。

十八成浜における祭りの後継者育成について

今から 7 年前ぐらい前の話ではあるが、前の区長に「区費を預けてくれないか」と直談判したことがあるという。それは、笛を 5、6 本買って子どもたちに笛を教えつつ、祭りの楽しみを教えたかったということを考えていたからであったが、区長からは却下されてしまった。

それから 2010 年に当時役員を務めていた O さんにも同様な話をし、「このままだと十八成浜には子どもたちが戻ってこないよ」と訴えた。すると、彼が「じゃあこれで笛を買ってこい」といって自分のお金を出してくれたので、それで笛を買ってくることができた。その後、祭りが終わってすぐの 2010 年 5 月に保存会を結成し、子どもたちを集めて練習を始めた。その時に集まった子どもたちは小学生が 4 人に幼稚園児が 2 人であった。中学生にも声をかけてみたが、すべて断られてしまった。話者が先生となり、その他に OM さんと T さん（共に 70 代）にも協力してもらった。会長は O さんが務めた。保存会として活動するにあたって、区が「憩いの家」を活動の場として無料で提供してくれた。そこでは笛と太鼓を教えていた。保存会を結成してから 1、2 か月ほど経過した頃、前の区長がやってきて「本気かどうか試してみたんだ」などと言い出した。あれには笑ってしまった。

どんと祭

神社の前にシャベルで穴を掘ってそこに正月飾りをいれて燃やした。それはわざわざ観に行くものでもなかった。夜 12 時までにそこに正月飾りを捨てに行き、消防団の人たちがそれを燃やす。これは話者が小さい頃から行っていたという。人がわざわざ観に行くということはしない。でも、それに合わせて昔正月 2 日〜3 日に行っていたシシフリも復活させてみてはどうだろうと考えていた。でも、子どもたちには無理かと考えていたが、2011 年 1 月 7 日には神社の前でシシフリを行った。普段は月 2 回ほど練習をするだけであったが、その前の週には毎日練習していた。シシフリをしたらお祝いのお金がもらえるので、それは活動資金とした。どんと祭は、人が集まるような場所をつくるいい機会ではないかと思う。だから、その時にシシフリをしたらいいのではないかと考えている。

子どもたちに「ばあちゃん達の頭を噛んできて」と言うと、獅子をパカパカさせながら噛みに行く。でも、力の加減がわからないから強く噛んだりしていたんだと笑いながら語った。

祭りに対する思い

祭りが無くなってしまうのは本当に寂しいという気持ちがある。継ぎ手がいないということもあるけど、この祭りの面白さを知らないで浜を離れてしまうのはつまらないのではなかと思うし、寂しいことだとも思う。話者は、このことについて熱をこめて繰り返し語っていた。祭りの主役は「白装束」であり本当に格好いい、ということも繰り返し語っていた。

その一方で、現在祭りに関わっているのは 10 代〜70 代と幅広くみえるが、その中間層が没干渉。だから、継承者ということを考えるととても難しい状況だと思うとも話していた。

神輿の購入について

神輿の購入には大体 300 万円ぐらいかかった。購入費用は寄付に加え、隣の浜にわかめ養殖のために海を貸出しているのでその賃貸料から賄われた。それは管理をしている支部から渡される。たとえば、「獅子舞の胴がボロボロ」と言うと、支部から費用を出してもらって新しい胴体を作ってもらえる。こういう状況は保存会にとってもかなり追い風になった。

祭りの際に行う獅子舞について

神輿が村落の中を練り歩く時には、4 本の竹に幣束がついたメ縄を張りわたして結界を作り、それを持ち歩く。それは、神輿が休憩する時はその結界の中に神輿を置くからである。神輿を結界の中において「白装束」が休んで

いる間に獅子が舞い、そしてモチをまいて…という感じで行う。移動中、獅子は軽トラックの後ろにおいてある。踊るのはハッピを着た人である。

去年（2011 年）の祭りについて

震災直後である 2011 年 5 月 3 日に祭りを行ったが、それは浜にいる人たちだけで行った。震災が起きた時は避難所の上の方にある山へ逃げた。津波が引いて行った時に「憩いの家」に行き道具が無事かどうかチェックした。一応心配だから高いところに挙げた時に第二波が襲ってきたので再び逃げた。津波は合計 6 回やってきた。震災が起きた日は他所の家に寝させてもらっていた。津波が落ち着いた後は「憩いの家」を皆で片付けて、そこを避難所にした。幸い祭りの道具の流失はなかった。

その時は話者のみが祭りを行いたいと考えていた。以前のような祭りは無理でも、せめてナオライ（＝祭りの後の飲み会）をするだけでもいいとも考えていた。すると、それを聞いた K さんというボランティアの方がインターネットに「十八成浜で祭りをする」といったようなことを書きこんだ。この人は徳島出身のボランティアの人。別の浜を拠点にしていた人だが、十八成浜にも時々来ていた。すると、その 2、3 日後に会津若松から軽トラックに乗った人が訪ねてきた。ネットの書き込みをみてやってきたと言っており、「お祭りするんですよね？是非この酒を飲んでください！」といって酒をおいていった。それから話者宛ての荷物がどんどん届くようになった。そこには「お祭り担当（話者の名前）さま」などという宛て名が記されているものだから、浜の皆に「本当にお祭りをするのか？」と聞かれたりした。当の K さんはニヤニヤ笑っているだけだった。その後も荷物は届き続けた。ネットの書き込みから始まったこととはいえ、話者自身もはや気持ちも抑えられなくなっていたし、テンションもあがっていた。そこで、先の O さんに「祭りをしたい」と改めて伝えると「じゃあ総会で皆に意見を聞こう」といった矢先に、発砲スチロールに入った野菜が 30 箱も届いた。それを見て区長が「もうやろう！」といい、祭りを行うことになった。K さんがインターネット上に書き込んだのが、ツイッターなのかフェイスブックかわからないけど、みんな見ているんだなと思った。

ただ、総会で祭りをすると言った時は、反対意見もでた。浜の人も 2 人亡くなっているし、孫（子？）を大川で亡くしたというおばあさんからは総会の時に泣かれたりした。それでも「どうぞ怨んでくれ」と思った。そういうこともあり、「復興祈願祭」ということでやろう、そして神輿も下ろそうということになった。ただ、役所からは例年のように道路を歩くことはやめてほしいと言われた。物資を運ぶ車や自衛隊の邪魔になってはいけないということからだ。そのため、道路の内側を歩くことになった。話者は 5 月 1 日から役所で臨時職員としての採用が決まっていたが、事情を話すと「祭りが終わってからきてもらうということで構わない」といわれたそうだ。

祭りの本番は本当によく晴れていた。450 人ぐらい人が集まり、ボランティアさんにも助けてもらいながらなんとか祭りを実施することができた。送られてきたお菓子をまいたところ、来客者は袋にお菓子をいっぱいいれて持ちかえることになった。みんな袋をぱんぱんにして、ニコニコしてかえっていった。それをみてやってよかったと思った。その時は 7 台ほどの屋台がすべて無料で出てくれる以外にも、化粧品を無料で配ったり、散髪屋なども無料でやってくれた。屋台では肉から先になくなっていった。それは長らく肉を食べていなかったからだと思う。そういうこともあって、話者は連休に入ると東京に行ってお世話になったボランティアさんたちと会って酒をごちそうしたりしているという。そのようなつき合いは今もつながっているようである。

話者が祭りの実施を決めた時のことを回想しながら、祭りをするとなった時には周りからのプッシュが大きくなるにつれて、引くにひけなくなったことも大きいとも語っていた。荷物が話者宛てに届くと、話者の父が御礼の電話をかけるなどをしてくれたという。

今年の祭り

4 月に区の総会を行い、そこで開催を決定した。今期から O さんは区長になったので、「お祭りやるからよろしく！」というかんじで言われた。O さんはその前までは役員だった。

（詳細は 2012 年 5 月 3 日の山口未花子氏による報告を参照）

今後の獅子舞への思い

牡鹿半島にある浜 15 すべての浜連合での獅子舞大会をしたいと考えている。各浜のものを見せ合っていきたい。子どもたちにまわせることで、後継者を作ることもできると思うし、かなり有意義な催しになるだろう。とにかく、忘れ去られてしまうということは寂しいことだし、祭りの楽しさを知らないということが残念でならない。祭りの楽しさを体感すれば、子どもたちは浜にも戻ってくると思うという旨のことを繰り返し語っていた。

（補助調査者が「4 月に七ヶ浜町吉田浜というところで獅子舞の調査をしてきた」と話すと、話者は「吉田浜に知り合いがいる」という話になり、獅子舞保存会の方かもしれないということになった。吉田浜の獅子舞の状況を話すと、「それは是非見てみたい」と話していた。吉田浜の獅子舞は塩釜まつりなどでも舞台化されて演じられているので、そういう機会があるかどうかを調べる予定である。）

クジラ料理

クジラ肉をつかった「トイッコ汁」という料理がある。それは本当においしい。

写真 1　祭りでの笛（話者提供）

写真 2　2012 年 5 月 3 日の白山神社での祭りのあとの直会。会場にボランティアからの寄せ書きがあるのがわかる。